

論文の要旨

ジャワ時代の武田麟太郎

広島大学大学院教育学研究科 博士課程後期
文化教育開発専攻日本語教育学分野

D133969

SYAHRUR MARTA DWISUSILO

シャルル マルタ ドウイスシロ

本論文は、武田麟太郎の指導下にあった啓民文化指導所の文学者の視点から、インドネシアにおける戦時中の武田麟太郎の活躍を歴史のインドネシア人資料に照らしつつ、実証的に明らかにするものである。

第一章では、武田麟太郎のジャワ・バリ巡回の文化視察について論じる。これらの文化視察の記録は、『朝日新聞』の漫画「フクチャンシリーズ」をはじめ、ジャワの現地新聞『うなばら』などに連載された。帰国後に創作した彼のエッセイ『ジャワ更紗』においても重要な素材となっている。武田麟太郎はジャワ文化の中心スラカルタ(Surakarta)とジョクジャカルタの町を、昔のおとぎ話のような世界として描いている。このジャワ全島巡回の一行は全員スラバヤに集合した後、バリ島にも渡った。バニユワンギー(Banyuwangi)からフェリーでバリ島に渡る港で、武田麟太郎は、バリの光景を、ジャワ同様、しばしば日本を連想させる場面として描き出した。このような表象は、この二か月の武田麟太郎のジャワ・バリ文化見聞において頻出していることが判明した。

第二章は、戦時中のインドネシア、とりわけジャワ像の変容を明らかにする試みとして、『ジャワ更紗』における南進論著作の存在と、これに対する武田麟太郎の姿勢について論じる。武田は「日本人に対するインドネシア人の信頼感と親密感」の原因を探るという設定で『金儲けの爪哇』と出会い、戦前に蘭印(インドネシア)へ進出した商人たち、いわゆるジャワ在留邦人の貢献を語り始める。武田の歴史語りにおける文献の出発点は、伊藤直矢の『金儲けの爪哇』にあった。『金儲けの爪哇』は、主にジャワでの商業のノウハウを提供するものであるが、『金儲けの爪哇』における「独り大和民族の祖先たる馬來人種の故郷たり、又徳川氏中世に於ける吾が不遇英雄の功名地たりし点より云つて、吾が日本との関係は蓋し少からざるものである」という過去のロマン的關係に連続している。このような歴史観は、『金儲けの爪哇』より一年前に出版された『南国記』に既に見ることができる。『南国記』の重要な点は日本人を南方起源の「南人」と捉え、日本人の「北進」は歴史の約束に反するという主張にあった。この南方起源論は、江川薫の『南洋を目的に』にも影を落としている。

武田麟太郎も、この南進論的な南方起源論と全く無関係だったわけではない。彼は、インドネシア人との同一性論も展開しており、『なつかしい風物』(一九四二年)において、「ここはたしかに一度来たことがあるといふ感じがして、全くはじめて踏んだ土地とは思はれない。自分の血のなかには、ここをよく知つてゐるものが流れてゐるのを自覚するのだ」と述べることによって、この南方起源論を連想させる。明治末期の南進論著作以来継続してきた日本人の南方起源論も、武田麟太郎に影響を及ぼしていることは明らかである。

第三章では、武田麟太郎による日本的オリエンタリズムについて論じる。「同じアジア人」という同一性の言説は、日本植民地支配の正当性を補強する論理として機能したという点で、ジャワ時代の武田麟太郎作品は、オリエンタリズムの変容と見なすことができる。サイードのオリエンタリズム論における他者の認識においては、帝国主義と植民地化のもとでの西洋の偏見と、異国としての中東やアジアに対するエキゾティシズムの奇妙な絡み合いの感情が両立している。それに対し西原大輔は、日本の場合、他者としての中国認識においては、近代化に遅れたアジアの国々に対する偏見が過去の美への憧れとしての「支那趣味」と結びついたと指摘している。このようなオリエンタリズムの要素は、昭和時代にも引き継がれ、インドネシアにおける武田麟太郎の他者認識にも残っている。『ジャワ更紗』におけるインドネシア人の性格描写には、それが明確に示されている。つまり、インドネシアに住む華僑の問題である。

華僑に関する表現は、金、利子、商売などの言葉とかかわっており、「支那」は経済を連想させ、権力との関係においては、インドネシア人の支配者として出現している。つまり、『ジャワ更紗』においては、思想の支配者としての「西洋人」「毛唐人」に対し、経済的な支配者は「支那人」とされている。このような経済的イメージと他者としての「支那」の出現は、ある狙いと意味を含んでいた。それは、武田が行う批判を可能にする仕掛けであり、当時の母国の政策に対する批判的な考え方を表現する装置であった。内地（日本）によるインドネシア認識のあり方への批判は、他者としての西洋への批判でもあった。換言すれば、西洋を他者として出現させることにより、武田の思想的文化的批判が行われたのである。これと同じように、他者としての「支那」を登場させることにより、武田が経済的な視点で批判を行ったことを示している。つまり、インドネシアにおける日本の経済政策のあり方への批判である。

武田麟太郎は、インドネシア人の貧しさに共感し、「インドネシア人の生活は低すぎる、悲惨すぎるよ」とよく口にしていた。そのため、日本に全面的に向かいかねない武田の批判は、他者としての「支那」に向かい、隠蔽した形で表現された。他者の存在が分裂することは、ジャワにおける日本的オリエンタリズムの特徴である。

第四章では、啓民文化指導所の文学部事業における武田麟太郎の宣伝活動および、インドネシア文学との関わりについて考察する。武田麟太郎がこの文学部の事業の中で最も重視したのは、青年文学会の開催であった。武田麟太郎は青年文学会を結成し、若手のインドネシア人文学者アルミン・パネの下で啓民文化指導所の文学部員として働いた。一九四三年六月九日から青年文学会の講談会を一月一回定期的に行っていた。武田麟太郎が確実に読んだ彼らの作品は、帰国後の『ジャワ・バルー』に掲載されたウスマル・イスマイルとアオ・カル

タハディマジャの短編小説である。武田麟太郎がジャワを去った日から、『ジャワ更紗』の発行までの期間を見ると、アオ・カルタハディマジャの作品は「郷土のために！ (Boekan Karena Akoe)」(一九四四年四月)のみであったが、ウスマル・イスマイルには「チトラ、郷土は呼ぶ (Citra, Panggilan Tanah Air)」(一九四三年十二月)と「白帆 (Lajar Poetih)」(一九四四年四月)という二つの短編があった。

ウスマル・イスマイルは、現地職場への作家派遣という事業のため、西ジャワのバギル市にあった綿の農園に派遣された。そこで創作した作品が、「チトラ、郷土は呼ぶ」である。この作品が、当時の郷土防衛義勇軍(PETA)と兵補(HEIHO)の参加と関連したものであることは、タイトルにも明示されている。この両者は、青年文学会において特殊な存在であった。文学活動の指導のみならず、軍事訓練も受けさせた。ウスマル・イスマイルは、アオ・カルタハディマジャと共に、一九四三年十二月十四日に郷土防衛義勇軍(PETA)の訓練所に派遣された。このウスマル・イスマイルの体験は詩「朝の物語 (Kisah di Waktu Pagi)」の他、短編「白帆 (Lajar Poetih)」に書かれている。「白帆」は海に憧れる主人公の物語だと姫本由美子が指摘しているが、同時に郷土防衛義勇軍の物語でもある。結末では主人公が勝利の海辺を目指すと言い出し、この決意は、太平洋戦争への参戦を意味するものである。一方、「郷土のために！ (Boekan karena Akoe)」は、日本文学報国会の第二回大東亜文学賞のジャワ代表に決定した、その理由は、防衛義勇軍として育つ原住民の姿を描いたからである。

武田麟太郎がこれらの作品を、「遅しく延びて行くインドネシアの反映」として評価したことは、インドネシア人の青年文学会の作家たちの作品に郷土防衛の精神を注入したことを示している。戦後において、ウスマル・イスマイルは、啓民文化指導所時代の短編「チトラ、郷土は呼ぶ」を映画化し、時代の変化を迎えた若者の葛藤を描写した文芸作品として高く評価された。そのため、現在インドネシア最高映画賞は「チトラ」と称されている。彼は、独立後においても、菊池寛の脚本「父帰る」を上演し続けており、戦時中の文学が彼に深い印象を残したことは間違いない。

第五章では、ジャワ時代の武田麟太郎と、パネ兄弟の文学、特にサヌシ・パネの文学を分析する。『ジャワ更紗』において武田麟太郎は、アルミン・パネを「インドネシア人による最初のインドネシア史の大著に没頭してゐるサヌシ・パネ氏の弟だけであつて」と、サヌシ・パネとの関係において紹介している。サヌシ・パネは、インドネシア人作家の中で最も日本軍政に協力した文学者である。彼は宣伝部のマレー語報道機関誌『大アジア (Asia Raya)』や『東方文化 (Kebudayaan Timur)』誌などの運営にも深く関わっていた。

サヌシ・パネは一九二八年から一九三〇年にかけての二年間、インドに滞在し、インド文化を直接体験した。そのインド体験は、オランダ語のエッセイ「インドの印象 (Impressies van India)」(一九三〇年) および、「インドの伝言 (De Boodschap van India)」(一九三〇年) に記され、次々と彼の作品に表現された。彼が最も多くインド体験を描いた作品は、一九二九年から一九三〇年にかけて創作された詩集『マダークラナ (放浪の歌)』(一九五七年) である。

彼はインド滞在中、劇本『アイルランガ (Airlangga)』(一九二八年) および『ガルダが孤独に飛ぶ (Eenzame Garoedavlucht)』(一九三〇年) をオランダ語新聞『ティムブル (Timbul)』に掲載した。これらの文学の主な素材は、古代ジャワ王国である。サヌシ・パネは、ジャワ文化に馴染み深い古典文学『ラーマヤナ』および『マハーバーラタ』の場面を連想し、インドを古代ジャワの文化として捉えている。

帰国後、サヌシ・パネは劇本『ケルタジャヤ (Kertajaya)』(一九三二年) を発表した。さらに、一九二八年十月の青年会議で上演した『マジャパヒトの夕暮れ (Sandyakala ning Majapahit)』が一九三三年にオランダ語新聞『ティムブル』に掲載された。これらの作品の素材も、滅びた古代王国の再現であるが、古代ヒンドゥー文化になかった、階級を超えた恋愛物語が出現している。劇本『ケルタジャヤ』における主人公、ケルタジャヤ王は、武士階級であるが、ブラフマン (ヒンドゥー教の指導者) の娘と恋愛関係を結び、相手の自決とともに情死する。『マジャパヒトの夕暮れ』においても、サヌシ・パネの西洋的ロマン主義を見ることができる。

このようなインドにおける西洋＝物質、東洋＝精神というサヌシ・パネの見解は、まさに岡倉天心と同一の考え方である。サヌシ・パネと岡倉天心は世代が離れており、インドを訪れた時期から見ても、彼らの直接的な接触はなかった。しかし、タゴールとの関係において、二人の接点が見られる。タゴールが岡倉天心の親友であったことは周知のとおりである。タゴールは、サヌシ・パネにとっても偉大な存在であった。タゴールが一九四一年にジャワを訪れた際に、最も熱く迎えたのは、サヌシ・パネであった。彼はタゴールの詩「ジャワ宛」(一九四一年) をインドネシア語に翻訳し、タゴールの思想について、エッセイ「思想者としてのタゴール」(一九四一年) を書いた。

インド趣味から日本を中心するアジア主義へと転換する岡倉天心のパターンは、サヌシ・パネの愛国的な文学にも見られる。サヌシ・パネは、現実の世界におけるインドとインドネシアとの同一性を否定している。つまり、サヌシにおけるタゴールおよびインドへの興味は、古代インドネシア文化としての「インド」との関係にあった。そこでは、サヌシ・パネが、独特な文化をもつ独立国を目指したのである。

岡倉天心の思想は戦時中に再評価された。例えば、浅野晃は戦時中のエッセイ「東洋の理想」において、「私自身天心から非常に大きな影響を受けたのであるから、この戦ひの劈頭に召されてジャワへ行くと云ふことは、私として非常な光栄であったばかりでなく、天心の志を思ふ時に、一入感慨の深いものがあった」と述べる。この岡倉天心の思想は、「大東亜戦争」と関わった文化人にとっても重要な原動力となった。武田麟太郎もインドネシア独立を推進する際、この岡倉天心の思想に頼った。

サヌシ・パネは日本占領直前に、すでに日本に対する興味を抱き、日本とインドネシアとの接点を探る試みを行なった。彼は一九四二年三月十二日の日本軍ジャワ上陸のわずか三日後、『プマンダンガン』誌に日本語についてのエッセイを発表し、一年後に『日本語案内』という本にこれを掲載している。サヌシ・パネの日本語への興味に関して、当時の武田麟太郎は、「日本語はそのままに日本の精神」というサヌシ・パネ宛のメッセージを残し、応援の趣旨を述べている。岡倉天心の思想との類似という点でも、武田麟太郎におけるインドネシアへの愛着において、サヌシ・パネの存在が大きな役割を果たしたことは間違いない。武田麟太郎がパネ兄弟に手紙を残したのは、彼らの文学に共感できるもであったからである。インドネシアの「独立」を目指した帰国後の武田麟太郎の背後には、アルミン・パネのみならず、サヌシ・パネの面影も見られるだろう。

以上、ジャワ時代の武田麟太郎像およびインドネシア人文学者との交流について、いくつかの変化過程を見出すことができた。このジャワ時代の武田麟太郎の研究は、インドネシア人文学と日本文学との接点を探る最初の段階として、有効な視点となるだろう。

武田麟太郎とインドネシア人文学者との交流を中核にしたこの研究においては、特にパネ兄弟に焦点を据えたが、他の南方徴用作家とインドネシア人文学者との交流も、今後の課題としたい。

主要参考文献

一、日本語文献

芦谷信和編『作家のアジア体験—近代日本文学の陰画』（世界思想社、一九九二年）

浅田次郎（他）編『コレクション 戦争と文学 8 アジア太平洋戦争』（集英社、二〇〇二年）

浅田喬二編『「帝国」日本とアジア』（吉川弘文館、一九九四年）

浅野晃『浪漫派変転』（高文堂出版社、一九八八年）

アルミン・パネ『桎梏—インドネシア文芸興隆期の珠玉作』（編集室らくだ、一九八〇年）

池田浩士『[海外進出文学] 論・序説』(インパクト出版会、一九九七年)
伊藤直矢『金儲けの爪哇』(実業之世界社、一九一一年)
井原西鶴『井原西鶴集』(朝日新聞社、一九四九年)
入江寅次『明治南進史稿』(井田書店、一九四三年)
浦西和彦・児島千波編『武田麟太郎』(日外アソシエーツ、一九八九年)
江川薫『南洋を目的に』(南北社、一九一三年)
大江賢次『アゴ伝』(帝制社刊、一九五八年)
大谷晃一『評伝武田麟太郎』(河出書房新社、一九八二年)
岡倉天心『東洋の思想』(講談社学術文庫、一九九三年)
奥出健「作家のアジア体験(1)——武田麟太郎のインドネシア」、『創造と思想』
八号(湘南短期大学国語国文学会、一九九八年)
加藤鏖五郎『蘭印は動く』(国民新聞社、一九四一年)
神谷忠孝・木村一信編『南方徴用作家—戦争と文学』(世界思想社、一九九六年)
神谷忠孝・木村一信編『<外地>日本語文学論』(世界思想社、二〇〇七年)
河西晃祐「徴用作家北原武夫・浅野晃・武田麟太郎の「インドネシア」戦時期
「南方」観の一考察」(『紀尾井史学二十一号』、二〇〇二年)
川村湊『南洋・樺太の日本文学』(筑摩書房、一九九四年)
姜尚中『オリエンタリズムの彼方へ—近代文化批判』(岩波書店、二〇〇四年)
木村一信編『南方徴用作家叢書 ジャワ編(南方軍政関係史料)25』第一卷~
第十五卷(龍溪書舎、一九九六年)
木村一信『昭和作家の〈南洋行〉』(世界思想社、二〇〇四年)
木村一信『もうひとつの文学史—「戦争」のまなざし』(増進会出版社、一九九
六年)
キーン、ドナルド 徳岡孝夫訳『日本文学の歴史—近代現代編』(中央公論社、
一九九六年)
キーン、ドナルド 角地幸男訳『日本人の戦争—作家の日記を読む』(文藝春秋
社、二〇一一年)
クリーマン、フェイ・院『大日本帝国のクレオール〈植民地期の日本語文学〉』
(慶応義塾大学出版会、二〇〇七年)
子安宣邦『「アジア」はどう語られてきたか—近代日本のオリエンタリズム』(藤
原書店、二〇〇三年)
後藤乾一『近代日本と東南アジア』(岩波書店、一九九七年)
後藤乾一編『南洋便り・市来龍夫書簡集』所収「市来龍夫略年譜」(早稲田大学
社会科学研究所資料シリーズ2、一九九一年)
サイド、エドワード・W・、今沢紀子訳『オリエンタリズム』上下(平凡社、
一九九三年)
庄野英二『絵具の空』(理論社、一九六二年)
十河巖『ジャワ旋風』(宋栄堂、一九四三年)
十河巖「ジャワの武田麟太郎」、『小説公園』(六興出版社、一九五七年四月号)
高見順『高見順全集』十九卷(勁草書房、一九七四年)
高見順『昭和文学盛衰史』(講談社、一九六五年)
武田麟太郎『武田麟太郎全集』第一卷—第三卷(新潮社、一九七七年)

- 武田麟太郎『武田麟太郎全集』第一卷—第十四卷（六興出版部、一九四六年）
 武田麟太郎『ジャワ更紗』（筑摩書房、一九四四年）
 武田麟太郎『世間ばなし』（相模書房、一九三八年）
 武田重三郎編集『ジャガタラ閑話—蘭印時代邦人の足跡』（出版社出版年不明）
 竹越与三郎『南国記』（二西社、一九一五年）
 西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム—大正日本の中国幻想』（中央公論新社、二〇〇三年）
 姫本由美子「日本占領期のインドネシア文学—啓民文化指導所に集まった作家たちの作品」、『アジア太平洋研究科論集』二十号（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科出版、二〇一一年）
 舟知恵訳『ヌサンタラの夜明け ハイリル・アンワルの全作品と生涯』（彌生書房、一九八〇年）
 文化奉公会編『大東亜戦争陸軍報道班員手帳（従軍随想）』（大日本雄弁会講談社、一九四三年）
 文化奉公会編『大東亜戦争陸軍報道班員手帳（ジャワ撃滅戦）』（大日本雄弁会講談社、一九四三年）
 町田啓二『戦う文化部隊』（現書房、一九六七年）
 村井紀『南島イデオロギーの発生—柳田国男と植民地主義』（福武書店、一九九二年）
 村松剛編『昭和批評大系 第二巻』（番町書房、一九三八年）
 室伏高信『南進論』（日本評論社、一九三八年）
 矢野暢『日本の「南進」と東南アジア』（日本経済新聞社、一九七五年）
 矢野暢『「南進」の系譜』（中央公論社、一九七五年）
 矢野暢『日本の南進論と東南アジア』（日本経済新聞社、一九七五年）

〈現地新聞など〉

- 『昭和十九年ジャワ年鑑』ジャワ新聞社、一九四四年（復刻版、ビブリオ、一九七三年）
 『赤道報・うなばら』（南方軍政関係資料21）』（復刻版、龍溪書舎、一九九三年）
 『ジャワ・バル—新ジャワ（南方軍政関係資料8）』一九四三年一月一日号～一九四五年八月一日号（復刻版、龍溪書舎、一九九二年）

二、英語文献

- Anderson, Benedict, *Java in Time of Revolution, Occupation and Resistance, 1944-1946*, (Jakarta: P.T. Equinox Publishing Indonesia, 2006)
 Bhabha, Homi K., *The Location of Culture*, (New York: Routledge Classic, 2004)
 Hutchinson, Rachel and Mark Williams, *Representing the Other in Modern Japanese Language, A Critical Approach*, (New York: Routledge, 2007)
 Keene, Donald, *Japanese Writer and the Greater East Asia War, The Journal of Asian Studies*, Vol.23, No.2, (Association for Asian Studies, 1964)
 Said, Edward W., *Orientalism*, (London: Penguin Books, 2003)
 Said, Edward W., *Culture and Imperialism*, (New York: Vintage, 1994)

- Schiller, Jim and Barbara Martin-Schiller ed., *Imagining Indonesia, Cultural Politic & Political Culture*, (Athens: Center for International Studies-Ohio University, 1997)
- Sudo, Naoto, *Nanyo-Orientalism: Japanese Representations of the Pacific*, (New York: Cambria Press, 2010)
- Teeuw, Andries, *Modern Indonesian Literature*, (Netherland Springer, 1967)
- Teeuw, Andries, The Impact of Balai Pustaka on Modern Indonesian Literature, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Vol.35, No.1, (University of London, 1972)

三、インドネシア語文献

- Armijn Pane, *Gamelan Jiwa, Kumpulan Sadjak-Sadjak*, (Bagian Bahasa Djawa Kebudayaan Departemen P.P. dan K., Djakarta, 1960)
- Armijn Pane, *Sonnet dan Pantun*, (Pudjangga Baroe, Volume.2, No.8, 1933)
- Armijn Pane, *Kisah antara Manusia*, (Balai Pustaka, Jakarta, 1953)
- Akhdiat K. Mihardja, *Polemik Kebudayaan*, (Perpustakaan Perguruan Kementerian P.P. dan K., Djakarta, 1954)
- Fandy Hutari, *Sandiwara dan Perang, Politisasi terhadap aktifitas Sandiwara Modern Masa Jepang*, (Ombak, 2009)
- H.B. Jassin, *Kesusastran Indonesia di masa Jepang*, (Balai Pustaka, 1975)
- J.U. Nasution, *Pudjangga Sanusi Pane*, (Gunung Agung, Jakarta, 1963)
- Sutan Takdir Alisyahbana, *Menuju Masyarakat dan Kebudayaan Baru*, Akhdiat K. Mihardja, *Polemik Kebudayaan*, (Perpustakaan Perguruan Kementerian P.P. dan K., Djakarta, 1954)
- Sanusi Pane, *Mandah Kelana*, (Dinas Penerbitan Balai Pustaka, Djakarta, 1957)
- Sanusi Pane, *Kertajaya*, (Pustaka Jaya, Jakarta, 1987)
- Sanusi Pane, *Sandhyakala ning Majapahit*, (P.T. Dunia Pustaka Jaya, Bandung, 2013)
- Keboedajaan Timoer*, No. 1-3, (Keimin Boenka Shidosho, Djakarta, 1943)
- Djawa Baroe*, (Djawa Shinboensha, Djakarta, 1943)